

11月1日

十字架の義と愛 ルカ23：26—48

マタイ27：31—54

マルコ15：20—39

ヨハネ19：25—30

○「父よ！ 彼らをゆるしてやって下さい。彼らのわきまえのないこの仕打ちを！」（ルカ二三・三四）

○「わが神、わが神、何ぞ我を見棄て給ひし」（マタイ二七・四〇）

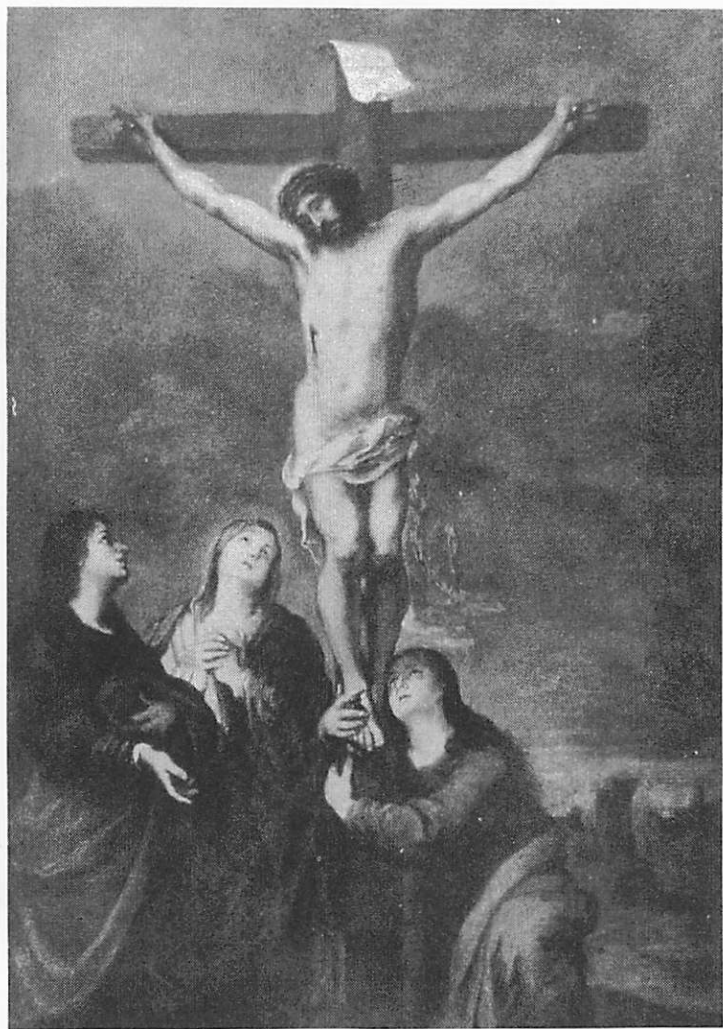
○イエス大声に叫ぶ、「父よ、わが霊を御手にゆだね。」（ルカ二三・四六）

イエスが十字架されたのは朝の九時頃。彼の十字架の両側に二人の強盗が十字架に懸けられた。何たるコントラストか。正に罪人の首とされたわけである。実はキリストは自ら罪人の首となつてあらゆる人の罪を自ら負つて贖罪の死を遂げつつあった。憎しみのもろもろの眼をよそにして、み脚にしがみついたのはマグダレーナであつた。

罪なき人、神の子だけが贖罪の力を有っている。十字架上のキリストの「父よ、彼らをゆるしてやって下さい」の一言は世界史上の唯一の言である。私もこの一言でゆるされた。「わが神わが神何ぞ我を見棄て給ひし」のこの一言は、前言との絶対矛盾の自己同一である。イエスは全生涯を神意信徒現で貫いた唯一の義人である。この義の叫びがこれである。この義が立たないなら人類に義の意味も価値もなくなる。イエスは神然たる義のために大音声で叫んだのである。この義の叫びあつての「ゆるし」の愛である。十字架は正にこの縦の義と横の愛の徴である。イエスはこの烈々たる義とこの深刻なる愛のクロスするところに碎かれたのである（イザヤ五三・五）。かくて大声で「父よ、わが霊を御手にゆだね」と叫んだ。これに先だつ義の叫びの異言的大音声と共に神殿の聖所の幕が上から下まで二つに裂けた！ 旧約の預言はここに成就し、旧約の世界はここに破れ去つた！



(ヨハネ19：25) 十字架上のキリストを慕い仰ぐマグダレーナ（カルロ・ドルチ）



(ヨハネ19：25—27) 十字架上のキリストの御脚を抱いているのはマグダレーナ。中央は母マリヤ、左はその妹

11月1日

(詩) 十字架上の七言

作詞1985.3.10

歌調S.136「血潮したたる」

- | | | | |
|---|---|---|---|
| 4 | 3 | 2 | 1 |
| 地の罪びとを 執りなしてぞ
十字架イエス 叫び給ふ
「道に外れし 彼らなれば
ゆるしたまへや 父よ神よ」 | 「主よキリストよ 憶えたまへ
み国の旅に昇るときに」
「よき告白ぞ、我と共に
汝れは今日しも バラダイスぞ！」 | 「汝はキリストか いざおのれと
我らを救へ」 かくうそぶく
声に応へて 「我らは罪！
汝畏れよ 神の聖名を」 | あやしき雲に空は暗み
ゴルゴタの上に立つは何ぞ
十字架は三基 何の徴
罪びと左右 義人真中 |
| 8 | 7 | 6 | 5 |
| 「わがたましひを 聖手にゆだね
父よみ神よ！」 大音声！
聖所の幕は 震ひ裂けぬ
天地ともに 霊に震ふ | 血潮したたり 地に泌み入る
「あわれ喝く！」 血の呻きぞ
「事は畢りぬ」 愛の叫び！
あがなひの業 ここに成りぬ | 天地海冥 午後の三時
「わが神、み神！ 何ぞ我を
見棄て給ひし！」 かく叫べば
雷光雷鳴 これに応ふ | ヨハネを見詰め マリヤに言ふ
「女よ見よや これは汝が子」
ヨハネに向ひ かくはさとす
「母のマリアは 汝が母なり」 |

11月2日

キリストとマリヤ・マグダレーナ

復活のキリスト（其一）マルコ15：40-16：9

マタイ27：56-28：9

ルカ8：1-3, 24：10

ヨハネ19：25-20：18

「その処（ゴルゴタ）にて遙かに望み居たる多くの女あり、イエスに事へしガラヤより従ひ来りし者どもなり。その中にはマグダラのマリヤ：居れり」（マタイ二七・五五）。（アリマタヤの）ヨセフ屍体をとりにて淨き亜麻布に包み岩にほりたる己が新しき墓に納め、墓の入口に大なる石を転まはしおきて去りぬ。其処にはマグダラのマリヤ：墓に向ひて坐し居たり（三七・五九-六二）。一週の初の日のはの明き頃、マグダラのマリヤ：墓を見んと来りしに、視よ大なる地震あり、これ主の使天より降り来りてかの石を転し退け、その上に坐したるなり。三八・二 女たち恐れと大なる歎なげびをもて速かに墓を去り弟子たちに知らせんとて走りゆく、視よ、イエス彼らに遇ひて「安かれ」と言ひければ、進みゆきて、御足を抱きて拜す（三八・八、九）。一週の首はじめの日の払暁、イエス復活して先づマグダラのマリヤに現はる（マルコ一六・九）。「女よ、何ぞ泣く、誰をたづぬるか」：イエス「マリヤよ！」と言ひ給ふ。マリヤ振り返りて「ラボニ！」（先生！）と言ふ。：マグダレーナ往きて弟子たちに「我は主を見たり」（ヨハネ二〇・一二-一八）

11月2日

キリストとマリヤ・マグダレーナ

復活のキリスト（其一） マルコ15：40-16：9

マタイ27：56-28：9

ルカ8：1-3, 24：10

ヨハネ19：25-20：18

ガリラヤ湖の西岸近くのマグダラのマリヤは資産少なからぬ女性で他の女性たちとイエスの伝道に財その他を以て奉仕していた。霊的な女性であるので七つの悪鬼になやまされていたが、イエスに完全に癒されたので彼女は最も献身的に仕え且つイエスを全的に慕っていた。ナルドの香油を壺を碎いて惜しみなく灑いだ「ある女」こそ彼女だと思う。十字架の主のみ足に抱きついたのも、墓場を先づ訪ねたのも、復活の主に先づ出遭ったのも彼女。皆夫々の場合彼女が第一人者であった。

11月2日

(詩) 復活の主とマグダレーナ (ヨハネ20)

作詞：1981.4.17

歌調：S. 214「北の極なる」

復活の主とマグダレーナ

1 イエスは十字架に あがなひの死を

果たし給うて 葬られぬ

主の日の晨 死に勝ち給ひ

霊震をもて 石扉倒す

2 マリヤ・マグダラ 石扉なきを見

ベテロ、ヨハネに その旨告ぐ

弟子たち走り み墓を見しに

主の影見え おどろきたり

3 泣きつつマリヤ み墓のうちを

見れば二人の み使立つ

白き衣の み使は言ふ

「女よ何ぞ 泣き悲しむ」

4 「誰かわが主を とりのぞけしや

いづこにおきし 我れ知りたし」

彼女振り向けば 人影のあり

「女よ泣くな 誰をさがす」

5 マリヤはそれを 園守と見て

「君は何処に 彼を置きし」

主は懇ろに「マリヤよ、マリヤ」

声におどろき 「ラボニ、わが師！」

6 マリヤ迫りて、主に寄りすぎる、

「われに触るな、弟子に告げよ

父のみ許に われは昇ると」。

マリヤ弟子らに 主を証しす。

7 その夕主は 閉ちたる室に

入り給うて「シヤロム・ラケム！

我れ汝らを 世につかはさん

祈り入りてぞ 聖霊受けよ！」

11月3日

エマオ途上のキリスト

復活のキリスト（其二）エマオ途上のキリスト（ルカ24：13-32）

エルサレムの弟子たちに現はれたキリスト（ルカ24：33-43）

（ヨハネ20：19-31）

○視よ、この（復活の）日（の午後）二人の弟子エルサレムより：エマオといふ村に往きつつ、凡々有りし事どもを互に語りあふ。イエス自ら近づきて共に往き給ふ。……「ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よキリストは必ずこれらの苦難を受けて、その栄光に入るべきならずや」……「我らと共に留まれ、時夕に及びて日も早や暮れんとす」……共に食事の席に著き給ふ時、パンを取りて祝し、裂きて与へ給へば、彼らの目開けてイエスなるを認む。而してイエス見えずなり給ふ。」（ルカ二四・二三……三二）

○イエスその中に立ち「平安汝らに在れ」と言ひ給ふ。かれら怖ぢ恐れて……靈ならんと思ひしに、……「汝ら何ぞ心騒ぐか。……我が手わが足を見よ、これ我れなり。我を撫でて見よ、靈には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見る如し。」……イエス言ひ給ふ「此処に何か食物あるか」かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、之を取り、その前にて食し給へり。（ルカ二四・三六……四三）

キリストの復活体は我々の理性の次元をはるかに越えた靈性の体现である。可視、不可視自在の在り方をなし給う。而も復活のキリストが一片の魚を食べたとは！



(ルカ24: 28—31) エマオ途上のイエスと二人の旅人 (レンブラント)



(ヨハネ20：26—29) 復活のキリストとトマス

11月4日

聖霊を約束するキリスト

復活のキリスト（其三） マタイ28：16—20

ルカ24：44—49

マルコ16：14—18

ヨハネ20：19—31

○されば汝ら往きてすべての国人を弟子となし、父と子と聖霊の名の中に漬け（ものとせ）よ！（マタイ二八・一九）

○「視よ、我は父の約し給へるもの（聖霊）を汝らに贈る。汝ら上より靈力を著せらるるまでは都に留まれ。」（ルカ二四・四九）

○「全世界を巡りて、凡ての被造物に福音せよ。信じて（聖霊の中へと）バプテスマされる者は救はるべし。……信ずる者にはこれらの徴伴はん、即ちわが名に在りて悪鬼を逐ひ出だし、新しき（異）言を語り、……病める者に按手せば癒ゆ。」（マルコ一六・一五—一八）

○「平安汝らに在れ、父の我を遣はし給へる如く、我も亦汝らを遣はす」息を吹きかけ言ひ給ふ「聖霊を受けよ」（ヨハネ二〇・二一、二二）。

復活のキリストは、今や聖霊を与えんことを強く望んでおられる。十字架によって贖罪の大業を果されたからである。しかし彼らはまだ十字架の贖罪を全身で受けとるところまで来ていない。やがてその期がくる。それまでまだ祈り待つ十日間を要した。十字架の後四十日間、復活のキリストは自在に現はれて永遠の生命を実証されたから、彼らは歓喜と希望に満ちては来たが、聖霊づけ（バプテスマ）となるまでは本当の力は臨まない。

11月5日

復活のキリストとペテロ
復活のキリスト（其四）ヨハネ21：1-25

「ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝りて我を愛するか」^{（マカバス）}ペテ

ロいふ「主よ、然り、わが汝を愛することは、汝知り給ふ」イエス

言ひ給ふ「わが羔を養へ」……「誠に誠に汝に告ぐ、汝若かりし

時は自ら帯して欲する処を歩めり、されども老いては手を伸べて他

の人に帯せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん。」是れペテロが如

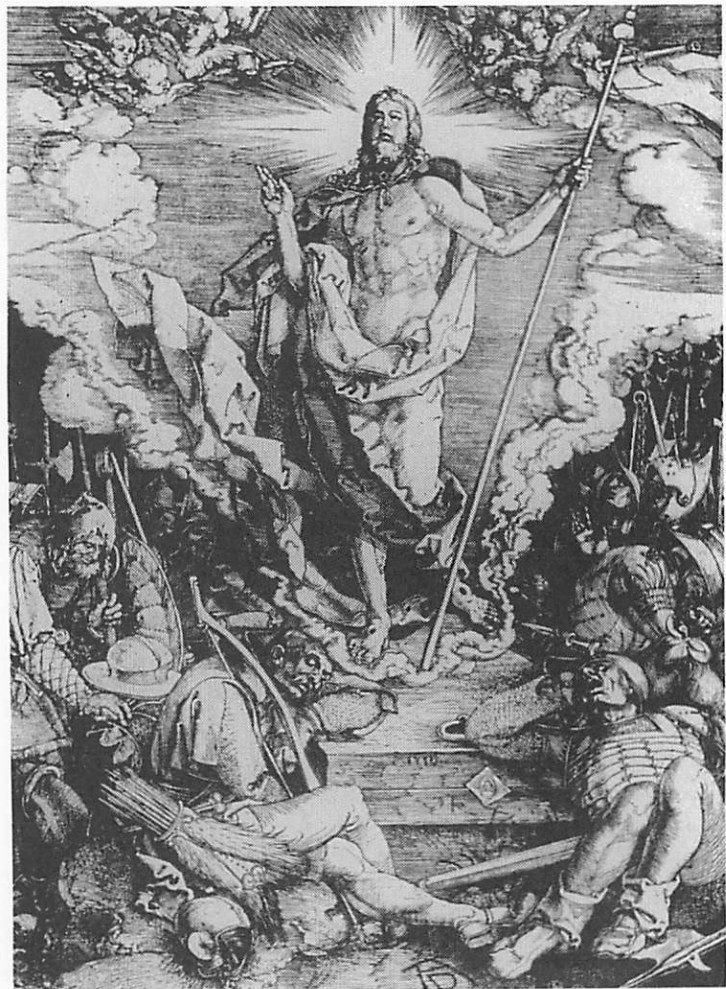
何なる死にて神の栄光を顯すかを示して言ひ給ひしなり。かく言ひ

て後彼に言ひ給ふ「われに従へ」。^{（ヨハネ二一・一五、一八、一九）}

ヨハネ福音書第二十一章は他の福音書にない記事である。天使がイエスの墓場を訪ねた女たちに告げたように、イエスはテベリヤ（キンネレテ、ガリラヤ）湖畔に帰って来た弟子たちに現はれた。そして彼らの漁獲を助けて百五十三尾の大魚を得させた。

そのあとで右掲の如くイエスはペテロに語りかけ、同じことを三度び訊ねた。「羔を養へ」とは牧者となって伝道せよ、人を漁れ、というキリストの本願である。そしてあの「クオ・ヴァデイス・ドミニ」（主よ、何処へ往き給ふや）に対するキリストの指示に従ってローマに戻り逆十字架にかけられ殉道の死を遂げたのはキリストのこの預言の如くであった。「神の栄光を顯す」とはこのことである。

ヨハネ、「主の愛し給ひし弟子」はエペソ伝道の後、パトモス島でキリストの「顯示」を受け「黙示録」（顯示録）を書く使命を帯びていた。



(マタイ28：16—20) 復活のキリスト（デューラー）

11月6日

キリストの昇天

マルコ16:19-20

ルカ24:50-53

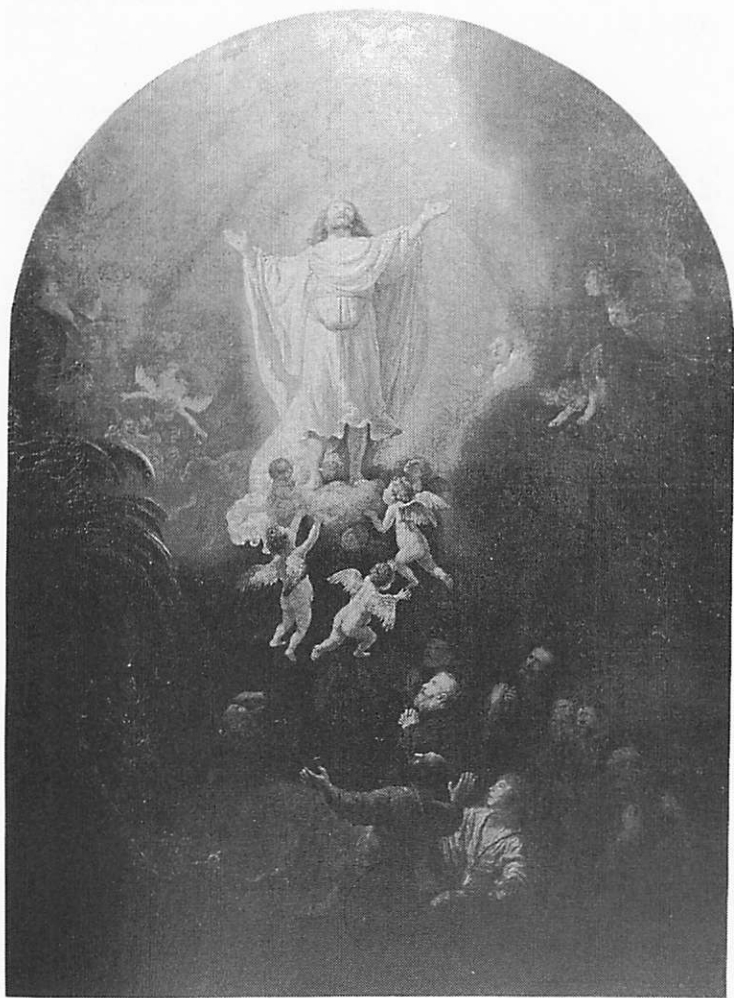
○^{五〇}遂にイエス彼らをベタニヤに連れゆき、手を挙げてこれを祝し給ふ。祝^{五二}する間に彼らを離れ給ふ。彼ら大なる歡喜をもてエルサレムに歸り、常に宮に在りて神を讚美したり（ルカ二四・五〇―五三）。

○^{五三}語り終へてのち、主イエスは天に挙げられ、神の右に坐し給ふ。弟子たち出でて、遍く福音を宜べ伝へ、主もまた偕に働き、伴ふところの徴をもて、御言を確うし給へり（マルコ一六・一九、二〇）。

イエスの実存を見ると、天界における神との共在、天からの降誕（受肉）、ヨルダンに於ける受洗（受霊）、サタンとの一騎打なる曠野の靈戰、靈言靈行を以てするガリラヤ伝道、ヘルモン山間での変貌栄化、ゴルゴタ丘上の十字架、三日目の復活、ベタニヤからの昇天、やがて五旬節の聖靈降臨、そして歴史の終りを劃する再臨、新天新地に於ける愛の王者。という十二相、十二転進と称はん哉である。

「人の子の栄光を受くべき時來れり。誠に誠に汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん。もし死なば、多くの果を結ぶべし」（ヨハネ二・二三、二四）。十字架の死を遂げる前の千歳の遺言である。イエスは一粒の麦どころか、いかなる原子爆弾もかなわない原始核である。この原始核爆弾によって無数の人々が光と生命と愛の世界に救い入れられた、そして世の終末まで。

そして福音の証者は一粒の麦となつて後進の魂にキリストの芽を吹き出させ花咲かせ果を結ばせてゆく。私にとって舎兄小池政美がその死を以て一粒の麦たることを身証した。



(ルカ24：50—53) キリストの昇天（レンブラント）

11月7日

約束の聖霊 (使徒行伝 1: 1-14)

されど聖霊、汝らの上に臨むとき、汝ら力を受けん、しかしてエルサレム、ユダヤ全土、サマリヤ、及び地の極にまでわが証者とならん」(使徒行伝 1: 8)

使徒ルカは医者で使徒パウロの弟子にして同労者、ルカ福音書と使徒行伝の著者として福音のため不朽のはたらきをした人物。この第一章のはじめに、イエスが十字架の死のあと、復活して四十日間しばしば弟子たちに現はれ、なほ神の国を語り、彼らに特にエルサレムを離れないで自分から聴いた父なる神の約束、即ち聖霊の降臨を待つように告げた。弟子たちはイスラエル国の回復のことを尋ねたが、イエスはその時期は神の権威の中にあるのみ、汝らの知る要なし、と答へた。一九〇〇年経てイスラエル共和国が建国した(一九四七年)。しかし現イスラエル国は果してキリストの本願に適っているか。キリストの本願の国は実は地上のいづれの国にも成就されない。キリストの体、キリストの幕屋としてのエクレシヤ(教会、直訳は召団)が全世界に散在している。それらが本ものであるためには、右掲のキリストの本願たる聖霊体受をしなければならぬ。十字架の贖罪は既に歴史的事実として果された。十字架を身受すれば、必ず聖霊は臨む。キリストへの祈入が現に焦眉の問題である。使徒たちはこのキリストの聖言に従って祈り待っていたら果然、俄然、臨んだ。彼らは本当に力を受けて聖霊の力の人となつて、力強い伝道が始まった。これを記しているのが使徒行伝、謂はば聖霊行伝である。であるからカトリック(旧教徒)にせよ、プロテスタント(新教徒)にせよ、問題は現実に使徒的次元の信仰を体现、証身するにあるのみ。

11月 7 日

(詩) 十字架と聖霊 作詞：1980.10.14

歌調：S.343「こよなきめぐみの」

十字架と聖霊

- 1 われには受くべき バプテスマあり
ゴルゴタの丘の 十字架にぞある！
- 2 罪をばあがなふ 棄身のわざを
成し遂ぐるまでは 祈りに祈る。
- 3 あがなひわざなる 十字架のちに
聖霊臨まん 祈り待てかし。
- 4 聖霊臨まば み力に満ち、
聖国のみ民と 汝れはなるべし。
- 5 聖霊の火のほか 何をかのぞまん！
ハレルヤの叫び 汝れは叫ばん！
- 6 主のこのみこころ われに成りたり！
み霊の身証を なさずばあらじ。

11月7日

(詩) 十字架・復活・聖霊降臨 作詩：1979.12.12
歌調：S.320「主よみもとに」

十字架・復活・聖霊降臨

1

「わがみ神よ 十字架の
この苦杯を 取り去り
み許にゆき 父と共に
とこしなえに 在りたし

2

されど我は み父の
み旨により 十字架を
負いて往かん ゴルゴダへと
我を棄てて 従はん」

3

主の十字架の かたえに
悪しき者ら 懸けらる
驕る心 砕ける胸
これぞ人類の 分れ目

4

主言ひ給う 砕けの
胸の者に 「汝は
我と共に 今日この時
パラダイスに 在るべし！」

5

午後の三時 天地は
雷鳴のため 晦冥
いなづま飛び 地震振へり
歴史を絶つ 徴候ぞ

6

十字架の主は 叫べり
エリエイレマ サバクタニ
更につづく 大音声
聖所の幕は 裂けたり

11月7日

(詩) 十字架・復活・聖霊降臨 作詩：1979.12.12
歌詞：S. 320「主よみもとに」

7

主は十字架を 荷なひて
あがないわざ 果たして
甦りて 現れたり
マグダレナに 最先に

8

復活の主は 昇りて
神の右に 坐したり
み約束の み霊降だす
時を待ちて 祈り給ふ

9

聖霊は火か 疾風か
祈る群に 臨めり
ペンテコステの バプテスマぞ！
エクレシヤは 成りたり

11月 8 日

ペンテコステ

五旬節 (聖霊降臨)

行伝 2: 1-47

二・一ペンテコステ

五旬節の日となり、彼らみな一処に集ひ居りしに、烈しき風の吹き来たる如き響、遽かに天より起りて、その坐する家に満ち、また火の如き舌現はれ、分れて各人の上に止どまる。彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異なる舌(言)にて語り始む。

ニサンの月の十四日、即ち過越の日、この日から数えて五十日目ユダヤ人は初穂を奉納する。この祝祭を五旬節と称している(レビ二三・一五―二二参照)。弟子たちは既に同信の者を集めて、昇天のキリストの命によって祈りつづけていたが、この「ペンテ―コステ」の日右掲の如き全く異常なことが起きた。正にこれが聖霊降臨であって、この日からキリスト教徒の歴史がスタートを切った。

この異なる舌の響きが「異言」と訳されている現象なのである。特にペンテコステに於ける異言は高次なもので、地中海の諸地方から(二・八―一二)五旬節を期して参集していた人々は各地方の言葉を以て使徒たちが福音を語るのを聞いたから驚いた(二・一二)。

「これ何ごとぞ」(二・二二)であった。筆者のキリスト召団には時にそのような高次の異言や預言や霊夢を賜る人々がある。現代世界を非常に嘆き憂える預言が示されている。天界のパウロからの言もある。

ペンテコステに於ける聖霊降臨は正に旧約の預言者ヨエルの預言の成就。使徒ペテロは聖霊を受けてがらり一変した。行伝二・一四―三六に互るペテロの滔々たる証言を聞いた人たちは聖霊を賜り、愛の美しい実存共同体が自ら成った(二・四三―四七)。

11月8日

(詩) ペンテコステの歌

作詞1981.5.5

歌調S. 239 「さまよう人々」

ペンテコステの歌

1

ゴルゴタの丘の 十字架の上
天涯孤独の 主の御姿
あがなひの血潮 地に滴り
十字架に極まる 主の義と愛

2

主はよみがえりて 墓を破り
マグダラのマリヤ 女たちと
弟子にこかしこ 四十日
現はれ給ひて 約束せり

3

「汝れらは日ならず 聖霊にて
バプテスマされん 祈り待てよ
聖霊臨まば 霊力を受く
世界の極まで 証者となれよ」

4

ペンテコステの日 相集ひて
使徒ら女たち 切に祈る
天よりにわかに 臨みたるは
み霊の疾風よ み霊の火よ！

5

祈れる者みな うちに燃えて
み霊に満たされ 異言の波
別人の如く 今や成りて
主のエクレシヤは ここに成れり

6

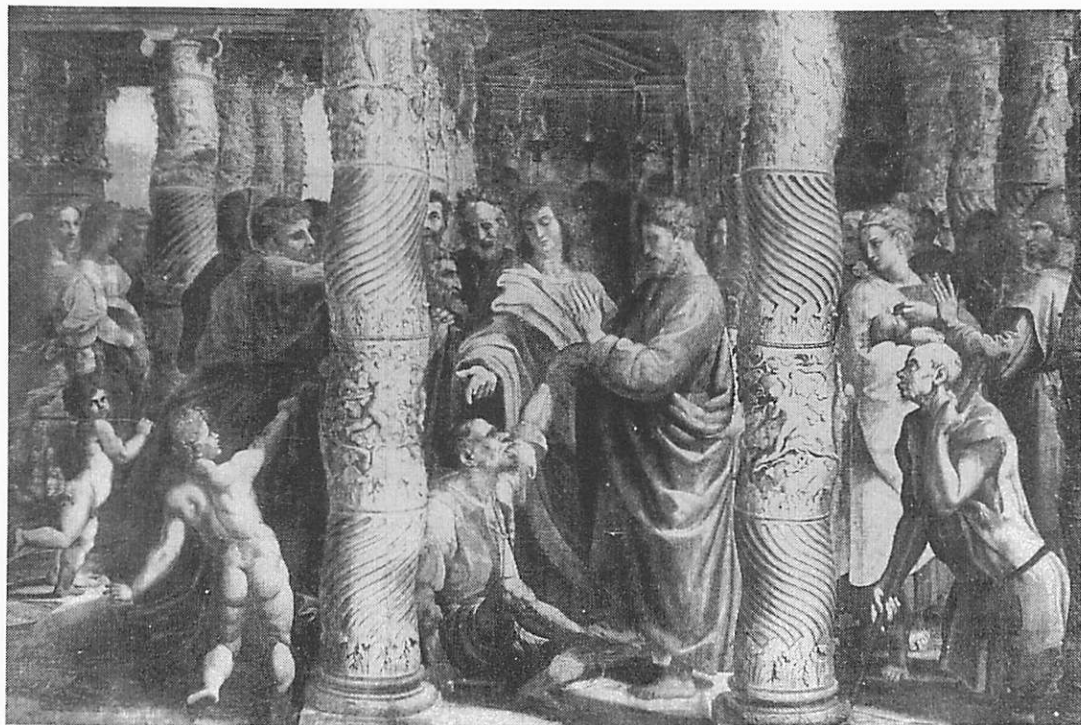
現今のエクレシヤ 危機を孕む
使徒らの次元に 立ち帰らん！
われらもいよいよ 祈り入りて
み霊の証しを 果たし往かん

11月9日

キリストの無者ペテロ
(行伝3:1-26)

四 ペテロ、ヨハネと共に目を注^とめて「我らを見よ！」と言ふ。彼^五れ
 (跛^{あしなえ}者) 何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、ペテロ言ふ
 「金銀は我に無し。然れど我に有るものを汝に与ふ、ナザレのイエ
 ス、キリストの名の中で歩め」。直^{ただ}ちに歩^ハみ出だせり…。
 『イスラエルの人々よ、何ぞこの事をあやしむか。何ぞ我^三らが己^己が
 力と敬虔とをもて此の人を歩ませし如く我らを見つむるか。」われ
 らの先祖の神は、その僕イエスに栄光あらしめ給へり。(三・四一八、二二、一三)

生来の跛者が、神殿の「美麗の門」のほとりにかつがれてやって来て、宮詣での人々
 から生活の糧^{かて}を買う錢^{ぜに}を乞うことを習慣としていた。ペテロとヨハネがその前にさしかかっ
 た。ペテロは跛者をじっと見て、「我らを見よ！」といった右掲の如く。このときのペテ
 ロの言に注目。ペテロのからだの中にはキリストの名が活きていた。ということはキリス
 トの聖霊の力が充満していた。イエスの名は即^す聖霊である。「キリストの名の中で歩め」
 は聖霊のみにあづかつて歩め、ということ。ペテロの発言はそのまま聖霊の力であった。
 「わが言は霊なり生命なり」のキリストの言と同質にされているペテロであった。跛者が
 歩くのをみて人は驚いた(三・一二)。そこでペテロは、「何で我らを見つめるか」我らでは
 ないキリストだ、と叫んだ。ペテロは自分を何ものともしていない、正にキリストの無者
 と成り、キリスト一切である。聖霊に在る信仰の真骨頂を見よ！



(行伝3：4-8) 使徒ペテロと生まれながらの跛者

11月10日

最初の殉道者ステパノ

(行伝 6 : 1 - 8 : 3)

五二
うなじこわ

「項強くして心と耳に割礼なき者よ、汝らは常に聖靈に逆ふ。その先祖らの如く汝らも然り。汝らの先祖^{五三}たちは預言者のうち誰をか迫害せざりし。彼らは義人の来るを豫^{あらか}じめ告げし者を殺し、汝らは今この義人を売り、かつ殺す者となれり。」(行伝七・五一、五二)

十二使徒が聖靈と智慧に満ちた福音の戦士を七人選んだ。その第一人者はステパノ。

ステパノはキリストの聖靈とその力に満ちた人物で、民衆の中に不思議と徴^{しるし}を身証していた。これを妬む者どもが彼を誘^そつて「モーセと神とを濟^{けが}す言を吐いた」といって民衆と長老、学者どもを煽動して彼を捕え、議會に曳き出した。ステパノは堂々と議會で演説をした。その額は御使の如く輝いていた。イスラエルの信仰史を説法するのであった。その大演説の終りに当り、右傾の如く、「汝らは常に聖靈に逆う。……」と叫んだ。

ステパノが現代のキリスト教界一般を見たら、やはり同じ調子で叫ぶだろう「パリサイにして心と耳に聖靈のバプテスマなき者よ、汝らは常に聖靈に逆う」と。ステパノがここで義人といっているのはキリストのことである。「汝らは常に聖靈に逆ふ」と言ったのが、彼らを怒らせた。ステパノは聖靈に満ち、天に目を注ぎ、神の栄光とキリストを靈視して「視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給ふを見る」と叫んだ。町の外に逐い出され石で撃たれて殉道の死を死ぬ時「主よ、この罪を彼らに負わせ給うな」と祈って天界に凱旋した。サウロ、後のパウロはこの迫害を可^よしとした者の一人であった。このような十字架道は歴史の終末まで継がれてゆく。

11月10日

(詩) 殉道者ステパノ

作詞1980, 10, 24

歌詞 S 228 「ガリラヤの風」

殉道者ステパノ

1

みたまとちえの ステパノなれば
神の歴史を 力づく
パリサイの徒に 述ぶるすがたは
み使の如 かがやきたり

4

ああステパノは かく叫びたり
彼ら怒りて 彼をとらえ
町より出だし 石にて撃てり
ここにステパノ 道に殉ず

2

「父祖アブラハム イサクとヤコブ
兄らをゆるす 神のヨセフ、
出エジプトを 果せしモーセ
ダビデ・ソロモン 神のドラマ

5

み霊に満ちて 天に目をとめ
神の栄光と、主を仰ぎて
敵のゆるしを 主に祈りつつ
凱旋したり わがステパノ!

3

うなじは硬く 心と耳に
割礼なきは 汝れなるぞ
げに汝らは 聖霊に叛く!
かくてイエスを 十字架せり」



(行伝6:1-8:3) 上: ステバノ大祭司及び議員どもの面前で大証言をなす
下: ステバノ城門外で殉道の死を遂げる

11月11日

パウロの帰郷

行伝 9 : 1-22

21 : 40-22 : 21 (参照)

26 : 1-32 (参照)

往きてダマスコに近づきたるとき、忽ち天より光いでて、彼を環
り照らしたれば、彼れ地に倒れて「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害
するか」といふ聲を聞く。(行伝九・三、四) (九・二七、一八)

アナニヤ……彼の上に手を按きて言ふ「兄弟サウロよ、主、我を
遣はし給へり。汝が再び見ることを得、かつ聖霊にて満たされんた
めなり。」直ちに目より鱗の如きもの落ちて見ることを得たり。

律法学者ガマリエルの一弟子サウロは、ユダヤ教に熱心なバリサイの徒であつたから、
イエスの信者迫害の急先鋒で、ダマスコの諸会堂への大祭司の添書を持って、キリストの
道の者を男女に拘らず捕縛していた。ところが右掲の如くダマスコ途上でキリストの霊言
と霊光に靈撃されてぶつ倒れた。三日間、見えず、聞えず、という靈撃であつた。

しかしキリストはアナニヤという聖霊の器をしてサウロに按手せしめた。彼の按手によ
つて聖霊のバプテスマを受けた。彼の目から鱗の如きものが落ちた。この決定的な聖霊の
バプテスマによつて魂が開眼し、迫害したキリストに全存在を以て帰帰することとなつた。
こんな鮮かな回心帰郷はない。ステパノの迫害死を可としたサウロは慈に完全に降参！
ステパノの最後の祈りが彼の魂に甦つた。パウロはその後聖霊の力で、「ダマスコに住む
ユダヤ人を言ひ伏せた」(九・二三)。パウロはこのキリスト帰郷の体験を第二章では千卒
長の面前で、第二六章ではアグリッパ王の面前で堂々と告白した。

11月11日

(詩) パウロの回帰
(行伝 9) 作詞1980, 10, 24
歌詞 S 286 「神はわが力」

パウロの回帰

- | | |
|---|--|
| 1 | パリサイ・サウロは 基督者たちの
男女のすべてを 捕えて伴れてゆく |
| 2 | ダマスコへの途にて み霊の光に
矢庭に照らされ 途に倒れたり |
| 3 | 「サウロ、サウロ何ぞ我をば迫むるや
我はイエスなり！」サウロは平れ伏す |
| 4 | イエス、アナニヤに サウロを示して
「サウロは選びの器ぞ」と諭す |
| 5 | 「兄弟サウロよ！ 我は主イエスに
遣はされたれば 汝れに手を按かむ」 |
| 6 | 噫！ 彼の眼より 落ちたるは何か
鱗か心か！ 聖霊ぞ臨める |
| 7 | パウロは聖霊の バプテスマを受け
曠野に祈れば 十字架ぞ立ちたる！ |
| 8 | 「我は主と共に 十字架されたり
我れは地に死にて み霊の主に生く」 |



(行伝26) アグリッパ王の面前でキリスト回帰の証言を堂々と述べているパウロ

11月12日

キリスト者
(行伝11:19-30)

三三
かくてバルナバはサウロを尋ねんとてタルソに赴き、彼に逢いて
アンテオケに伴ひきたり、二人ともに一年の間かしこの教会に共に
集められて幾許かの群を教ふ。弟子たちのクリスティアノス(キリ
スト者)と稱へらるる事はアンテオケより始まれり。(行伝二・一九一三〇)

バルナバ(語義「慰めの子」)はその名の如く使徒たちに協力して慰安ともなり、仕手
役を充分つとめたパウロ的信仰の人であったから右掲の如くパウロをアンテオケに伴れて
来た。当時このオロンテス川沿いのアンテオケはエジプトのアレキサンドリヤに劣らぬ小
アジア半島のつけ根に位置する港市であった。ユダヤ人やギリシヤ人が、ピニケ、ツロ、
シドン、クブロス島等から信仰を求めて集まつて来た。ステパノの殉道が狼火となつたの
である。バルナバは勿論聖霊の人であるから、アンテオケに於けるパウロとの一年は異邦
伝道に最初の成果をもたらしした。人々は彼らをクリスティアノス(複数クリスティア
ノイ)と称した。クリスティアン(英語)はこれに由る。超ユダヤ教徒だからクリスティア
ノスの名がアンテオケ・エクレシヤ(教会)の信徒につけられたのは当然のことであつた。
要するにキリスト者の濫觴である。

ルターの宗教改革によって、「プロテスタント」(反抗者)と呼ばれる新教徒が生じた
のもこれに類し、ルターのロマ書序文に感動し、モラヴィア教団の影響も受けて、聖霊体
験をして立ち上ったJ・ウェスレーのホーリー・クラブ一団の在り方から「メソヂイスト」
という名称がつけられたのも之に類する。

11月13日

神の中に生き、動き、在る
(行伝17:16-34)

「我らは彼の中に生き、また動き、また在るなり」(行伝一七・二八)

聖霊はパウロとバナルバを選びの器として第一次伝道旅行(二三・一―四・二八)を小アジア半島の南部一帯に導き給うた。福音の証の言にはみ霊の力あり、また徴と不思議がこれに伴って、聖霊の業が到るところで現われ、異邦伝道の実は着々と実るのであった。

パウロの第二次伝道(二五・三六―一八・二三)にはシラスが同道した。パウロは靈幻を視て、小アジアからマケドニアに渡った(二六・六―一〇)。最初の入信者はルデア(女)とその一家であった(二六・一―五)。かくてギリシャ伝道が進展し、テサロニケを伝道し(二七・一―九)、ベレヤを経てアテネ伝道に移った。パウロはアテネのアレオバゴス(軍神「アーレスの丘」の意)で大説法をした(二七・二三―三一)。彼はこの説法の中で、アテネに「知られざる神に」という祭壇があるが、天地創造の神は、人の手で造った宮になど住まない云々と、喝破した(二七・二四―二七)。そして右掲の一句を叫んだ。しかもこの句は紀前三世紀のギリシャのストア的詩人のアラトスの詩句で、パウロにとってこの「彼」なる「神」はキリストである。聖霊の人となると、この句くらい身についた句は考えられない。「エン アウトー ソーメン カイ キヌーメタ カイ エスメン」である。ドイツの大詩人ゲーテが実はこの句「神の中に生き、動き、存る」を特愛していた。ゲーテは神・大自然・我の融合した魂であったからである。「わが衷なる神」が宗教の最高段階と彼は感得していた。これを体現したのが実はキリストである。

11月14日

パウロの按手
(行伝18：1～19：20)

彼らは（これを聞いて）主イエスの名の中へとバプテスマされた。即ちパウロの手が彼らの上に按かれると聖霊が彼らの上に臨んだ。すると彼らは異言を語りそして預言した。

その人々はみんなで十二人ほどであった。（行伝一九・五、六、七）

パウロはアテネからコリントへ移った。帝王クラデオのユダヤ人追放に遭いローマからやって来たアクラと妻プリスキラ（ユダヤ系ギリシヤ人）に出遭った。パウロと同業の幕屋製造業者であったので親交を結んだ。一年半ほどコリント伝道をした。何か仕事をしながらの伝道の自由をパウロは実証した。

かくて第二次伝道を終えてオンテオケに帰った（一八・二三）。

パウロは第二次伝道（一八・二三―二一・二四）に入って小アジアのエベソに来了。これにより先きアポロというユダヤ人が福音伝道をしていた。アポロの伝道によってキリスト者となった御連中とパウロとの問答で、彼らが水の洗礼者ヨハネ的なバプテスマしか受けていないことがわかり、聖霊のバプテスマをパウロは按手によって施した。勿論パウロはキリストの中に祈り入って聖霊に満されて按手するのである。そうすると手を通してみ霊の力がつたのである。聖霊のバプテスマを受けると、そのときの霊的な現象はいろいろだが、たましいがたしかに次元のちがったものを受けたことを体感する。パウロから受霊したのは、このとき十二名程だったという。筆者を通して十二の召団が聖霊のバプテスマによって生じているので不思議な冥合を感じる。

11月15日

パウロの棄身の伝道

(行伝19: 1-20: 38)

○神カインはパウロの手によりて尋常ならぬ力ある業を行ひ給ふ。

○ユテコユテコ熟睡して三階より落つ。……パウロ降りて其の上に伏し、

……『汝ら騒ぐな、生命は内にある』

○ただ聖霊ハルいづれの町にても我に証して縄目と患難と我を待つと告げ給ふ。然れど我わが走るべき道程と主イエスより承けし……福音を身証し尽さんためには固より生命をも重んぜざるなり。

○汝ら……聖霊は汝らを群の中に立てて監督エペスコポスとなし神の己の血をもて買ひ給ひし教会エクレシヤを牧せしめ給ふ。(二〇・二八)

○他の使徒たちはペンテコステの時に集団的に聖霊を受けたが、パウロは独り、ダマスコ途上で復活のキリストから一対一で聖霊の強烈なバプテスマを受けた。彼には全伝道に於て、言にも業にも聖霊の力が鮮かにはたらいた。

○トロアスでパウロは徹夜の集会をして語り明かした。高楼三階で聴いていた若者ユテコが睡魔に襲われて眠り込んで三階から墜落して死んだ。ところがパウロは急ぎ降りて彼の上に身体を伏せて祈った。エリヤ(王上二七・二四)。エリシヤ(王下四・三四)がかつてやったように。若者は甦った。到る処でパウロを通して聖霊の能力が発揮された。

○迫害はまたつきもので、彼は屢々身の危険にさらされた。併し聖霊は彼を支えた。

○教会は聖霊に満された人物に指導されることを第一前提とする！

11月16日

神の力

(ロマ 1 : 1-16)

我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始め、ギリシヤ人にも、凡て信受する者を救ひに入らしむる神の力なればなり。(ロマ・一六)

ユダヤ教バリサイ派の旗頭サウロは、ダマスコ途上で復活のキリストに靈撃されて聖靈のバプテスマを体受せしめられ、実存的大転回と成り、パウロに変身した。彼はアンテオケを起点として第一次、第二次、第三次と地中海沿岸世界の大伝道を果した。その間いくつかの公的書翰を彼のこの異邦伝道の力によって生じた諸教会にあてて書いた。

このロマ書はその第三次伝道の際、コリント滞在中にしたため、ケンクレヤ教会の女執事フィーベに託してロマ教会に送ったものである。彼の書翰は大方次の順に書かれたものと思われる。

テサロニケ前、後書、ガラテヤ書、コリント前、後書、ロマ書、コロサイ書、ビレモン書、エペソ書、ピリピ書、紀元五〇年前後から六〇年前後に亘るものである。

ロマ書はキリストの福音の十字架・聖霊を不離の二焦点とした生まの有機体的構造の神学を内に蔵している。福音の太陽系、または大殿堂と言わんか。福音書がキリストの御姿ならば、ロマ書はキリストの僕パウロの弁慶像とでも言わんか。パウロは伝道で患難と迫害に遭ったが、福音をいささかも恥とせず、いかなる民族の人であらうと、これを信受、体受するなら、ゆるぎなき救にあづかり得る世界的宗教として宣べ伝えたのである。その確信は何に據るか。ただ神の力に據る。具体的にはキリストから賜った聖霊の力である。神・キリスト・聖霊の力・生命・愛は無比なものである！

11月17日

神の義の顯現

(ロマ1:17-20)

神の義はその福音のうちに顯はれ、信仰より出でて信仰に入らしむ。録して「義人は信仰に因って生く」とあるが如し。(ローマ・一七)

「神の義はその福音のうちに顯はれ」という一句は、旧約時代のサウロには思いもよらぬ真理であった。神の義は律法を実践する者に於て顯われると思つていて、その律法の義を誇つていたサウロであった。生活の祈りに於て神意を承り、これに従うところに神の義があることを知らなかった。ところがキリストはモーセの律法を越えた神意に全存在を以て信従し、体現したのであった。神意体現に神の義が成就するのである。そのようなことはイエスの外誰もなし能はぬことである。我々が罪びとであるというのは、我意、我執のために神意に信従できない。神の義はその実践者、即ち義人イエスに於て顯われた。この義を与えるキリストが福音体である。キリストの十字架の贖罪を体受すると、キリストは我々の罪を贖いとして、罪なき無の根源現実を賜う。そしてキリストの義を賜わる。では義の實質は何か。聖霊である。イエスは神に全身を投入したから神と一如となった。すると神意は神の霊と共に受けとれた。神意を体現し得た力は聖霊であった。であるから十字架のキリストを信受体受すると聖霊が降臨してキリストの義が力ある内容として受けとれる。信仰は実は信入である。全存在的信行信入、そしてキリストと一如の信交である。これが信仰より出でて信仰に入る、である。パウロはハバク書二・四の聖句を福音的に引用した。実はこのような「信仰に生きる者が義人である」というのである。

11月18日

恵信の義：恩恵—信仰—信行—信交

(ロマ3：21—31)

然るに今や律法の外に神の義は顯はれたり。これ律法と預言者とに由りて證せられ、イエス・キリストを信受するに由りて信ずる者の中に臨みたる神の義なり。これには何らの差別なし。凡ての人罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、無償にて神の恩恵により、キリスト・イエスに在る贖罪によりて義とせらるるなり。

パウロは三章前半で、ユダヤ人もギリシャ人もみな罪の下にあると断じ、神の前に義人なし、一人だになしと告白している(三・九・一〇)。律法を厳守したと自任していたパウロ自身、実は律法の根本精神を満たしていなかったことを悟ったからである。律法は律法を越えた立場に立たなければ本当に満すことができない。これを成就したのがイエスであった。実は律法は隠れた福音であった。「汝殺すなかれ」ではなく「汝は殺さない」という神の信頼の言であつたからである。これを満すには神と一如になるを要する。人間にこれができない、「罪を犯す」我執者であるからである。「律法と預言者」即ち旧約聖書はキリストを指している、知らずして。福音が隠されている。神の義、聖意体現者たるキリストを信受、体受する者の中に神の義、キリストの義が与えられる。信仰は観念的であつてはいつまで経っても生命も力も来ない。この義は力、生命、光、天道、生きた自由の律法であるから信行一如の質をもっている。だから、キリストという恩恵体そのものを全存在で受けることが本当の信仰で、ハッキリ信交と書くべきだ。このような受けとりには必ず聖霊が同時に臨む。「義とされる」も「義を与えられる」意である。

11月19日

新しき永遠の生命

(ロマ6:1-23)

汝ら知らずや、凡そキリスト・イエスの中へとバプテスマされた^三我らは、彼の死の中へとバプテスマされたことを。それゆえ死の中へのバプテスマによりて彼と共に葬られたるは、キリスト父の栄光によりて死の中より復活し給ひし如く、我らも亦新しき生命に在りて歩まんためなり。(ロマ六・三、四)

さて今や罪より解放されて神に属ける僕とされたれば^三聖に至る汝らの実を得たり。その極は永遠の生命なり。それ罪の代価は死なり。されど神の靈賜^{たまもの}(カリスマ)は我らの主キリスト・イエスの中に在りての永遠の生命なり。(ロマ六・二三、二三)

キリスト・イエスの中へと浸された、とはキリストの十字架の中へ入れられたことで、パウロがガラテヤ二・二〇で「我はキリストと共に十字架されたり」というのと同じことである。キリストと共に十字架された(死の中へとバプテスマされた)以上、旧き我に根源現実^{根源}に於て死んでいる。それは相對現実ではなほ罪びとではあるが、復活のキリストと共に新しき(カイノス)もはや古びない生命に在って歩んでやまないためである。そのように罪と死から根源現実で解放された我らは神・キリストの僕として、キリストの義を賜っている聖靈に在っての現実である。相對現実では未だ聖ではないが、その中核たる実が与えられてある。永遠の生命の核も賜っている。

11月20日

罪との戦
(ロマ7:7-25)

我^{三三}は内なる人によれば神の法^{のり}(ノモス)を悦べど、我^{三三}は見る、わが肢体の中に他の法ありてわが心(ヌース)の法と戦ひ、わが肢体の中にある罪の法の中に我を虜^{どうご}とするを。

噫^{二五}我れ悩める人なるかな、この死の体より我を救はん者は誰ぞ！
神に感謝す、我らのイエス・キリストに頼^よりて！ (ロマ七・二二-二五)

ロマ書第七章七節以下二四節は、万人の心の葛藤の問題を告白している。心の中の善悪の戦を偉大な宗教家たちは洋の東西を問わず真剣に苦しみ戦って、夫々何らかの道を発見し突破して別次元の中に入った。それが救なのである、或は悟りなのである。ただこの戦を戦はず、一直線に信入して神と一如になった例外者がイエスであった。彼は罪を意識しても罪の虜にならず、これに勝った。しかしサタン、罪の首魁とは戦って決定的に勝ち給うた。このキリストこそは救主でパウロを救いあげた。私も救われた一人である。

「心の法」とは良心の法で、神の律法を学びこれに従わんとする先験的意識をもつ良心の法である。この良心はカントの言う善意志である。ところが肢体の中にある「他の法」というのは我執、エゴイズムの慾心の法である。ゲーテも「ファウスト」の中でこの戦を詠っている(二二〇-二二二行参照)。良心がとかく慾心に負ける。即ち人間はエゴイズムからぬけきれない。これが万人の悩みで、パウロは是に苦しんで「噫我悩める人なる哉、この死の体！」と叫んだ。アウグスティヌスも深くなやんだ。ルターも独房でこの苦しみでぶっ倒れた。キリストの十字架がこの罪性を贖って下さった。

11月21日

霊と肉

(ロマ8:1-17)

この故に今やキリスト・イエスの中に在る者には断罪なし。キリスト・イエスの中の生命の御霊の法は、汝を罪と死との法より解放したればなり。神のみ霊汝らの中に宿り給へば、汝らは肉の中に非ずして霊の中に在るなり。されどももしキリストのみ霊を有たずばキリストに属く者に非ず。(ロマ八・一、二、九)

キリストの十字架の贖罪を体受した者は、根源現実にて罪なき者とされているから、もはや罪せられることはない。十字架上のキリストがあの方の十字架上の盗賊を贖って天界に伴れていった事実はこのことの何よりの証拠である。パウロはその手紙の中で、「エン・クリスト」「キリストの中で」というたぐいの表現を一六四回用いている由。それほどまで彼の信仰の現実には正に信交的一如なるものであった。聖霊はキリストの永遠の生命の霊だから、その霊法は力をもっている。だから罪と死の法にうち勝ち既に解放して下さっている。

十字架・聖霊の絶対恩恵によって、我らは罪から解放され、復活の生命をみ霊に在って生きている。それがキリスト者である。もしそうでないなら、即ち聖霊を宿していないなら、キリスト者ではない、とパウロは九・九で明言している。パウロがここで肉(サルクス)の中」といっている肉とは自己本位な在り方を謂う。「霊ブネウマ」の中」の霊とは聖霊のことで、その現実には神・キリスト中心の在り方である。どんなに立派であっても自己中心は肉である。どんなに破れていても神・キリスト中心は霊である。

11月21日

(詩) 十字架・聖霊の現実
聖霊は原始力

十字架・聖霊の現実

1 十字架のもと 祈り入れば
み霊臨み 身は火の如し
魂も燃えて 聖名を讃ふ
わが主イエスよ わがすべてよ

2 主よわが主よ 今此処にて
我をとらへ み旨を示し
智慧と力 そそぎ給へ
汝がみ業を なさせ給へ

3 主よ、われらは 汝のもの
汝がうちにぞ 我ら生きて
汝が愛をば 生命として
愛に生きた 永遠まで

(作詞一九八一・九・五)
(歌詞S 35)「わが主イエスよ」

聖霊は原始力

1 信じ入れば 力を得
行に転じ 人を助け

〈おりかえし〉
主に在りて 力あり
主のみ霊こそ 原始力ぞ！

2 主に愛され 抱かれなば
捨身の愛 われにみつる

3 新天地の 望みに生く
主の光を 四方に放つ

(作詞一九八〇・一一・三七)
(歌詞S 54)「よわきものよ」

11月22日

聖霊の讃歌・聖霊の執り成し

(ロマ8:18-30)

二六 このように御霊もわれらの弱きに与し助けて下さる。我らはどう祈ったらいかわからないけれども、御霊みづから言ひ難き呻きをもつて執り成して下さる。

二七 また人の心を極め給う者はみ霊の念いをも知り給う。み霊は神に即して聖徒のために執り成し給う。(ロマ八・二六、二七)

ロマ書第七章は、罪の問題で地獄的な苦しみを内的に苦しんでいる。これは生れつきの我々万人が心の中に有っている問題である。大方はそれほど苦しまないでこの世のたのしみ、文明文化の中でお茶をにごしている。しかし真剣に自己と戦う人は苦しみなやむ。しばしばそのために自殺をする。文人や哲人にしばしばその例を見る。決してけなし得ない真面目な事柄である。

キリストの十字架でこの世の苦しみを突破させられたパウロは第八章にくると聖霊の天国的な次元のゆえに感謝と讃美に溢れている。第八章は聖霊の讃歌と名づけたい。

この八・二六は聖霊がいかに深い思い遣りの愛の霊であるかを告白している。パウロは八・一八―二五で自然も人間も救いの全うせられんことを祈り待つ消息を語っている。聖霊は、誰にも語れないまたわかってもらえない苦悩の中で祈りようのないときにも、聖霊は深い思い遣りと呻きを以て執りなして下さる。しかも二七節では「人の心を極め給う者」キリストがみ霊と念い一つにして下さっている。かくキリストも聖霊も神意に即して贖はれたる者(聖徒)のために執りなし給う。かくて本当の平安と力が臨む。合掌。

11月23日

神・キリストの愛

(ロマ 8 : 31-39)

三三 己の御子を惜しまずして我ら凡てのために付し給ひし者は、なか之にそへて萬物を賜はらざらんや。我らをキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ。患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。然れど凡てこれらの事の中に在りても、我らを愛し給ふ者に頼り、勝ち得て余りあり。われ確く信ず、死も生命も権力ある者も今ある者も後あらん者も……我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。(ロマ 8・三三-三九)

神が独子キリスト・イエスを我らの罪の贖いのために十字架にかけ犠牲の死を遂げしめたので、萬物も同じく惜しみなく賜はるという壮大な気宇である。それはまた何も要らないという逆説的なものでもある。このキリストの生命賭けの愛に圧倒されているパウロはいかなる苦難も迫害も、このキリストの愛から自分を離脱させることはできないと叫び、愛し給うこのキリストの中で、キリストと一如とされているから勝ち得て余りあると叫んでいる。そのあとでまた畳みかけていかなるものも神・キリストの愛から自分を離すことはできないと絶叫している。このロマ書第八章の終りの節のパウロは火のようだ。これはもはや文字ではない。ベートーヴェンの第九交響曲の合唱、ヘンデルの「メシヤ」のハレルヤ大讃美がこのパウロの絶叫に呼応していると言はんか。キリストの愛に圧倒されて生きてこそ本当のキリスト者。パウロはこの愛で万難突破、殉道凱施した。

11月24日

アナテマ魂
(ロマ9:1-3)

私はキリストの中で本当のことを言う、うそはつかない。わが良心も聖霊の中で自らに証する、私に大いなる悲しみがあることを、絶えず痛みがわが心にあることを。

肉に於けるわが兄弟わが骨肉のためにはキリストに棄てられ、呪詛となることすら願うところである。(ロマ九・一、二、三)

かつてはバリサイ派の親玉であったパウロは今や完全に聖霊の器としてキリストにみ霊に於て一如となっているパウロである。それ故ユダヤ教の頑固な連中を何としても回心転向させたい悲願に炎えている。各地方に散在しているユダヤ人たちをある程度は救ったが、迫害にも少なからず遭って来た。ユダヤ人の頑固さは誰よりもパウロ自身が知っている。復活のキリストに靈撃されぶつ倒されなければ心眼の開けなかったパウロである。だから仮令キリストの呪詛となっても肉のつながり、即ち同胞骨肉の救のためには願うと告白している。ユダヤ人の頑固さが彼の悲しみであり痛みであった。今もユダヤ人はなかなかキリストには回帰しない。メシヤはまだ来ていないといってキリストを認めない。キリストにもパウロにも願っている。実にキリスト自身が今もユダヤ人のアナテマで十字架につけ放しである。また聖霊を受けた使徒的信仰の基督者が、一般の観念的基督者たちからアナテマにされている。基督と共に創造的な改革者たちはいつの世でもアナテマである。

11月25日

神より出でて神に帰る
(ロマ11: 1-36)

二・三三 噫、神の智慧と知識とはいかに豊かにして深い哉！ その審判は測り難く、その諸々の道は尋ね難し。誰か主の心を知りし、誰かその相談相手となりしや。それすべてのものは神より出で、神によりて成り、神に帰するなれ。栄光永遠に神にあれ！

中世の偉大な神秘思想家エックハルトも言った。「神が理解できたらそれは神ではない」と。神学に組織神学という部門がある。神の真理はしかし組織化して可いものか。アクィナス、カルバタン、バルト、ブルンナーの如き偉大な神学者たちはこの部門に属する。彼らの神学上の業績に勿論心から敬意を表する。しかし、アウグスティヌス、エックハルト、キエルケゴール、スウェーデンボルク、ベルジャエフの類いの神学は組織ではなく告白的神学である。神学が神の啓示の書たる聖書を基とする限り、啓示神学であり、告白神学であるのが神学の本質であろう。パウロはその諸書翰を以ておのづから生まの神学を展開している。矛盾の要素、劇的な構成、有機体的な構造をもっている。神の鴻大な生ける真理（真法、靈法）に圧倒されているのだ。右掲の如き感嘆の言を吐露しているわけである。預言者たちは波状的に吹き寄せる神の啓示の言を伝えると、それは自ら詩になった。特にイザヤ書は驚くべきものだ。

私の如き小さな魂も神・キリストに圧倒されているので、聖霊の力と智慧で告白したら「無の神学」（著作集第三巻）になった。無即無量という性格である。天界の預言者や使徒を相手にしているのでそのうちに愚生からも詩泉が湧いて流れるであろう。

11月26日

愛は^{おきて}律法（道德）の完成
(ロマ13: 8-14)

汝ら互に愛を負ふのほか何をも人に負ふな。人を愛する者は、律法を全うしたるなり。愛は隣人を害^{そご}はず、この故に愛は律法の完成^{つい}なり。(ロマ三・八、一〇)

パウロはロマ書第十二章第一節で「おのが身を神の悦び給ふ清き活ける供物として献げよこれ靈の祭なり」といって、日常生活そのものが、神さまに悦ばれる生き方をすれば、それが本当の靈的な(靈的とは神中心ということ、地球が太陽中心で動いているように)お祭だという。そして彼は第十二章で、家庭や社会に於ける各人は、恰も有機体的人体の如く、夫々の部分が夫々の役割を完全に果してこそ健全な体であるように、各人がおのが存在の意義と使命をみ靈に在って自覚して果せよ、と懇切に語っている。

そして人体を環流してやまない血のように、我々は互に愛し合うことだけが大切だ、一切の律法、道德の事項も愛によってのみ全きを得る。愛が律法(道德)を満たすものと明言している。愛は単なる感情ではない。具体的に人助けをすることである。有形無形に愛の心がはたらくと、自他共にたのしいのである。快楽を求めるのは危いことだが、楽しさがおのづから伴う在り方が、本当である。「己の如く隣人を愛せよ」とは己を愛することとは人間の自然だが、それを顧みず、隣人(他人)を愛することが自然、靈然であれ、という。そのためにはキリストの中に祈り入って、「キリストを衣て」聖靈の愛の力にあづかることが極めて大切である。一三・一一—一四でアウグスティヌスの魂の目が醒めたことが、彼の有名な「告白」の中に書いてある。

11月27日

十字架と聖靈

(コリント前書 1:1~2:16)

○キリストは分離されたか。パウロはあなたのために十字架されたか。あなた方はパウロの名の中へとバプテスマされたか。

◎まことに十字架の言は亡びゆく者には愚かごとだけれども、救はれる我らには神の力である。(二・一八)

○み霊の(Pneuma ティコス)人は、すべてのことをわきまえる。しかも己れは人にわきまえられることがない。(二・一五)

コリント市は当時商業の中心的な大都市で、而も学問の都市でもあったが、他面偶像崇拜も多く、道徳的水準は低く「コリント」という語は淫蕩の代名詞の如き響きをもっていた。そのような雑多な因子の混淆している都市であるのでコリント教会の内部にもさまざまな問題が生じていたから、コリント教会は勿論パウロが建てたのだが(第二次伝道のと き)、彼はそのため、第三次伝道でエペソ滞在のときこの手紙を書いていろいろな實際問題に対して然るべき指示を与えている。

右掲の聖句を簡単に解説しよう。教会に宗派は生じて問題も無い。キリストに即する点では一つでなければならない。

「十字架の言」とは、十字架という言葉ならざる言、即ち十字架自身が無量の義と愛の表現であること。十字架をあざける類いの人は自ら滅びゆく。しかし、十字架に信入する我らは救はれ、同時に「神の力」が臨む。それが霊の力である。「み霊の ^{Pneuma ティコス} 人」は自分の性来の次元を越り超えて靈知を賜り、靈力にあづかる。その間の消息は第二章で。

11月28日

アナンケー（やむにやまれざるもの）

（コリント前書9：1～16）

我れ福音するとも、我れに誇るところ無し。やむにやまれざるもの（アナンケー）我を圧倒し居るなり。我れもし福音せざれば、我れは実に禍なるかな！（コリ前九・一六）

キリスト・イエスという恵みそのものが、義の実力者が、愛の実体が、そしてキリストの霊と一如なる聖霊の力がパウロの上にのしかかっている。パウロはキリストに全く圧倒されて生きている。「われ生くるに非ず、キリストわが衷に生き給うなり」（ガラテヤ二・二〇）の現実である。だから福音伝道（福音）せざんとするも能はずなのである。これを「やむにやまれざるもの」（原語アナンケー）、天的必然、靈然、まことの自由を以て福音しないではいられないと叫んでいるのである。必然と自由は一つなのである。生ける靈法である。

佐藤一齋がその「言志録」の中で、雲煙集於不得已。風雨漏於不得已。雷霆震於不得已。と詠じているように、雲も霧もやむを得ずして集る……そういう自然界の必然法則のように道徳界もそうであるなら、それを「至誠」という。宗教界では、パウロが此処で言っている「やむにやまれぬ言動は聖霊の力であり、生ける靈法であって本当の自由即ち靈然で、原語のアナンケーである。西郷南洲は一齋のこの言が好きで、天を相手として生きたら、そういう在り方となった。ヒルテューも『眠らぬ夜のために』第一巻四月十四日の箇所、「せざるを得ずして為す人のみが偉大なことを為す」と言っている。ルターはウォルムスで「我かくせざるを得ず、我此処に在り、神よ助け給へ！」と叫んだ。

11月29日

自主（自由）と僕（愛）の実存
(コリント前書 9：17-27)

我れいかなる人に対しても自主の者なれども更に多くの人を得んために、自らすべての人に対して奴隷となれり。我れユダヤ人にはユダヤ人の如くなれり。これユダヤ人を得んがためなり。律法の下にある者には、——律法の下に我れはあらねども——律法の下にある者の如くなれり。これ律法の下にある者を得んがためなり。弱者には弱き者となれり。これ弱き者を得んがためなり。我れすべての人には凡ての人の状相に従へり、これ如何にもして、幾許かの人を救はんためなり。(コリ前九・一九：二二)(コリ前一〇・三一—三三参照)

パウロのこのコリ前九・一九はルターの珠玉篇「基督者の自由」第一節の二命題の源となった。即ち、「キリスト者は万事に自主な者であつて誰にも依存しない。キリスト者は万事に奉仕する僕であつて、どの人にも依存する。」その意義は、絶対者たる神・キリストの僕であるから、誰にも依存しない自主自由者である。そのような自主自由者は自ら進んで聖霊の力の愛で奉仕する僕であるから誰にも仕える。だから神に在つての僕は自由で、この自由は愛の性格であるので、隣人に自ら奉仕するという意で、パウロの聖句に全く照応している。その自由は弾力性があるから、あらゆる人の立場に自らを置いて、聖霊の愛と力と智慧でそこから相手の人を福音へと導入するのが、本当の伝道なのである。決して上から高圧的に相手を説き伏せるのではない。

11月30日

聖霊とその霊賜

(コリント前書12:1-31)
(コリント前書14:1-40参照)

さて、兄弟たちよ、君らが霊の賜ある（ pneuma ティコス ）ことについて無知なのを私は好かないね。

ところで霊賜（ カリスマ ）は多種だが、霊は同一。奉仕（ デイアコニア ）は種々だが主は同一。

また活動はそれぞれだが、凡ての人の中ですべてのはたらき（ エネルゲイア ）をなし給ふ神は同一である。（コリ前二・一、四、五、六）

パウロは知情意のゆたかな人物、しかもこの三要素を統括する霊の根源に聖霊を賜ったので、すばらしい有機体的構造となった。聖霊を賜って祈りが深くなると異言が迸ったり、病者に按手すると病が癒えたり、人の世や自然界に対する預言が与えられたり、智慧（ソフィア）の言や、知識（グノーシス）の言を賜ったり、というようにさまざまな聖霊の賜（カリスマ）が人によって、また一人の人に於ても時機に適っているいろいろな賜が作用する。それはこの第十二章でパウロが証言している通りで、パウロは実に豊かに多種の賜を賜った。筆者もいろいろカリスマを賜っている。医者が不思議に思うような治癒の現象がかなり多く今までもあった。要するにパウロが一・二・三に述べているように、体は一つ、体の肢は多種で一つに統合されているように、聖霊は一つ、カリスマは多種である。そして賜の最大なものは愛の行為である。イエスは異言のことは語っていないが彼の言は霊言であるから「わが言は霊なり生命なり」で、死人を甦らせる力、自然の風波を鎮める力をもっている。それはみな愛の行為で聖霊は愛に於て最大の力を現はす。